
感染殺人～バイオキリング～

流星群

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

感染殺人／バイオキリング／

【NZコード】

N3851Z

【作者名】

流星群

【あらすじ】

これは人の命を助ける そんな感動的で素晴らしい物語ではない。生まれながらにして殺人鬼の主人公が、殺人鬼共を？狩る（ハウンティング）？話。

【 chapter 1 - 1 】 (前書き)

『 作者からの一言メモ 』

新しく書き始めた小説です

電撃大賞用で、各話が 80 - 130 ブラいいくと思います（電撃大賞の上限と同じ枚数にするので）
ですから、賞に送る前に、感想、評価等をしてくれたら作者が大喜びします！

書き終わること前提なので、長い目で見てください

【chapter 1 - 1】

「絶対にコロス！」

狼は一匹の兎えものを狙つていた。

真夜中の路地裏は、空の色より更に闇くろい。ぽつりと立つてゐる電柱の、心許ない明かりだけがそこら辺を照らしてゐた。汚物やらゴミやらが散乱し、より一層不気味にさせている。

そこを二つの影が通る。

息を切らし、「コミに躊躇ながらも必死に走る兎。それを難なく追う、狼。

彼らはかれこれ一時間以上も走り続けていた。

人がいれば、狼はその場を撤退し、兎の命は助かつていただろう。けれど、夜中とあって、しかも路地裏では人の気配さえもない。

「コロスコロスコロス！」

狼はもう何度も口かの怨嗟を口にしながら、右手に握り締めていた黒光りする硬い物体　拳銃を兎に向け、引き金を引いた。

パンツ！　と乾いた発砲音がし、ビルの外壁に大人の親指程度の小さな穴が空いた。

兎はヒイイイイッ！　と叫び声を上げながら曲がり角を右に逸れる。

「いいぞいいぞ！　徹底的に追い詰めてやる……。コロシでやる！　クククッ……ハハハハハハッ！」

歯をむき出しにして高らかに笑い、銃刀法違反の日本で拳銃を持ち歩く姿は、まさに獲物を狩る狼のハウタごときである。

「うして狩人は、拳銃で獲物を齧し、表通りに出られないようこ誘導していたのだ。

路地裏の、もっとも深い場所へと引きずり込むために。

闇の奥へと誘う獲物を、狩人は口元を不気味につり上げて、悠々と追いかけていた。

絶好の好機を伺うべくして、時を待つ。そして、その好機は、突然にして巡ってきた。

「ぜえぜえ……。はあ……うつ、嘘だろ！… 何で！ どうして行き止まりなんだよー！」

彼らが最終的に行き着いた所は、ビルの壁で囲まれた行き止まり。薄汚れた壁に背を預けて獲物はずるずるとへたり込んだ。どうあがいても逃げられないと悟ったからだろう。狩人は、ゆっくりと獲物に近づいていく。

ビビビビと、虫共が群がる電柱の下に、彼らの顔が曝される。

獲物はまだ若かった。齡一五、六ぐらいの少年。金髪に染まつた髪が汗で頬に張り付き、顔は苦痛で歪んでいる。元々綺麗だったのだろう制服は汚れ、茶色がかっていた。

対して狩人の方はといふと……彼も若かった。金髪の少年と同年代である。黒髪で眼鏡を掛け、どこか陰鬱そうな印象を受ける。けれど、彼は金髪少年とは違い、汗を一つもかいていない。出来損ないの笑みを浮かべ、余裕そうにしていた。

【chapter 1 - 2】

呼吸がやつと整い、まともに話せるぐらくなつて、金髪の少年は口を開く。

「きりと 霧戸！ 僕が何したって言つんだ！」

霧戸と呼ばれた黒髪眼鏡の少年は笑顔を消し、唇を噛みしめて怒りを露わにする。

「ダマれ！ 僕は君を口口サなれば氣が済まない！」

「ちよ、ちよっと。お前、本氣で言つてるのか？」

じりつと背後の壁へ更に後退する金髪少年。身体は小刻みに震え、みつともない姿だが本人はまるつきり気にしていないらしい。

滑稽な姿の彼を見て、霧戸は笑みを浮かべるぐらいの余裕がまた生まれた。

「ホンキだ。君が僕に何をしてきたのか覚えてるよな？」

「だって、あれは！ お前をからかってただけで……！」

「ウルサイ！」

思い出したくもない当時の出来事が鮮明に頭へと流れてくる。自分をあざ笑う彼らの声。殴り飛ばされた時の痛み。心に刻み込まれる屈辱の数々。それらがずっと霧戸を苛み、今の今まで消える事の

ない記憶となつていた。

霧戸は奥歯をギリッと噛みしめる。恋々として思い出をもかみ砕くぐらごに力強く。

「いいですか御堂様。御堂様はからかっていただけかとお思いになるかもしれません、僕は大変傷つきました。痛かったです。苦しかったです。涙が出ました。止めてください」と懇願したのに、でも御堂様は止めになりませんでした。僕が何を言つても！」

過去の思い出を無理矢理記憶の奥底から引っ張り出し、霧戸はそれを言ひ。

御堂と呼ばれた金髪少年は、霧戸の話を聞いて、はつとしていた。

「お前、その言葉遣こ……」

「御堂様がこいつこいつと言こましたよね？」

「それは、悪ふざけなり向でも許されると思つたとこつか……」

「悪ふざけなら向でも許されると思つたですか？」

「「めんーーー」この通り謝るから、お願ひ！ 許してくれ。殺さないでくれー！」

額をついて許しを請う御堂の姿に、霧戸の心は憎しみで溢れかえつていた。

「謝るから、許してくれ……？ フザけんなー、僕がどんな思いで

いたのか知りもしないくせに！ 今更謝つたって何もかも遅い！！」

激情のあまり、口調が戻っていた。でも、もうそんなことは気にしなくていい。どうでもいいのだ。霧戸はこれから、御堂にびくびく怯えなくとも、痛い思いもしなくても、恥辱に耐えなくてもいいのだ。だって、彼をこの手で始末するのだから。

「もういい。これ以上話しても無駄だ」

不穏な空氣を察したのか、電柱に群がっていた虫達が一斉にどんとかへ飛び去ってしまう。

空よりも、路地裏よりも濃い何かが、霧戸の体内から外へと放出される。

【chapter 1 - 3】

それは一見して、靄のようだった。

靄状であるため、形は存在しない。ふわふわと舞うその靄は、霧戸の身体を包み込むようにしていた。まるで、彼を身の安全から守るかのように。

川や湖、海や山に姿を見せるそれが、何故か路地裏から突如出現した。これだけで奇妙だが、その出現した場所が、人間の身体からである。

加え、霧というのは、大気中の水蒸気が冷却され、小さな粒状の水滴となり、地面近くを浮かんでいる状態である。

けれど、今は、蒸し暑い真夏の夜。普通ではあり得ない話だ。

更におかしなことがある。

靄や霧は水蒸気、つまり水であるため、無色透明なはず。けれど、霧戸の周りに漂う靄は黒かったのだ。墨をまき散らしたかのようだ。

「何だ？ 何をするつもりだ！」

「君には分からぬよ。絶対。僕のことを知らうともしなかつたんだから」

御堂は霧戸に起きた異変に気づいていない。黒い靄は、一般人には見えないので。なのに、彼は不自然に怯えていた。何か、この世

ならざる気配でも感じ取ったのかもしれない。

霧戸は左腕を身体の横に水平に持つてくる。すると、今まで霧戸の周りに漂っていただけの靄が、彼の左手に集まつていいく。そして、何かを形作つていく。

数秒の後に出来上がつたのは、拳銃だった。右手と併せて二丁の拳銃が彼の手に収まつている。

「なつ！ お前、今何をした！」

御堂は驚愕を張り付かせた顔をしていた。

彼からしてみれば、突如拳銃が虚空から現れたように感じたに違いない。手品と同じような感覚である。たとえ、種をバラしたとしても、御堂には一生分からないだろ？

黒い靄 【闇】と呼ばれるもの。これは、怨み、嫉妬、僻み、殺意、悪意、敵意、といった誰しも人間の心の中に棲む醜惡の基。負の感情である。

この黒い靄が、人間の欲望 負の感情 を叶えようと力を授ける。靄とはいえ、様々な形になり、また形を変えることが可能。そうして、形作られたものが【殺戮兵器】となるのだ。

兵器（武器）と命名されているが、もっと分かりやすい言葉でいうならば、人を殺す能力である。

殺人鬼によつて能力の系統は大きく異なる。

基本的には四の系統があり、霧戸は武器具現化系統に属している。靄を武器として具現化させる能力である。武器の種類は本人の既知の物に限るが、およよその武器になり得る物なら全てである。近代武器から、古代の武器に至るまで含まれている。

他の能力に比べると殺傷能力に幾分劣る「メリット」がある代わりに、最小限の闇で扱えることや、いくつもの武器を同時に扱えることや、闇が形作るのに時間が掛からないなどのメリットがある。

霧戸はどうやって御堂に復讐をしようかと企んでいる時に、たまたまインターネットで銃の事を調べていた。だから、拳銃を武器として発現させることが出来たのだ。

「君を『ロス』ために準備をしただけだ」

憎しみを込めた瞳で、御堂を睨み付ける。

両腕を持ち上げ、御堂に拳銃の標準を合わせ、引き金に指を伸ばす。

「止めてくれ！　お願ひだ、頼む！」

彼は、自分がしてきたことに対しても反対するどころか、最期の時まで自分の身の安全を守ろうとしていた。

我が身可愛わに出了行動に、霧戸の内部から怒りが泉のように沸き出す。

「これ以上生かすだけの価値は無いと判断した。

「楽にシネると思つなよ」

発砲音は途絶えることなく、何度も夜の静寂に響いた。

【chapter 1 - 4】

弾倉から全ての薬莢がはき出された頃、辺りは静けさを取り戻していった。

途端に、火薬と鉄の臭いが鼻につく。でも、決して不快ではないむしろ、全部に片が付いたことがより現実として理解出来、清々しい気持ちにさえしてくれた。

気づくと持っていた二丁の拳銃は元の黒い靄となり、そして風に乗つてどこかへ飛んでいつてしまった。

「！」これで僕は……自由になるんだあああアアアア！

興奮のあまり、霧戸は大声を出して飛び跳ねた。

いつまでもここでこうして喜びに浸つっていたかったのだが、誰かに見つかったら元も子もない。折角彼らから解放されたのに、今度は刑務所でお世話になつたら、今までしてきた全てが報われなくななる。

後ろ髪を引かれながら振り返ると、そこに いた。

電柱の明かりが、その人物と乗つているバイクを照らす。

ソイツは、バイクのエンジンを止め、慣れた動作で下りた。

高い。ヘルメットの高さを引いても、霧戸より頭一つ分ぐらい上に顔があり、百七十センチは余裕で超えていた。中肉中背で、真夏だというのに、サラリーマンが着ているようなリクルートスーツをしっかりと着用していた。

ソイツはヘルメットを脱ぎ、素顔を曝らす。短髪黒髪の少年の顔が闇夜に浮き上がる。

もつと年がいっているのかと霧戸は思っていたのだが案外若かく、内心驚いていた。同じ年ぐらいか、一つか二つ違う。十八歳だと思われる。

彼は上着も脱ぎ始めた。白いシャツが露わになる。そのシャツは右の袖部分がなかつた。代わりに、右腕には包帯がぐるぐると巻かれている。

「い、いつからそこにいた！　いつから見ていた！」

彼の不気味な雰囲気にあてられて、言葉を失っていた霧戸だったが、ようやく口に出来た。

自分の声が想像以上に震えている。声だけではなく、腕も足も、身体全体が恐怖で怯えていた。ソイツは危険だと、警告音が頭の中でウルサイぐらいに訴えかけてくる。

「……」

少年は何も発しない。会話する余地すらないとばかりに。

前方しか行くべき道はない。だが、そこには少年が立ち塞がっている。とてもじゃないが、彼が易々と霧戸を逃がしてくれるとは思えなかつた。殺人現場を見られてしまつては。

「おい！　何とか言えよ！　黙つてるだけじゃ何も分からぬんだよー！」

全身の震えを抑えつつ叫ぶ。だが、当然のことく少年は何も言わ

ない。

彼は一歩霧戸の方へと近づき、右腕を払った。生きているかのように、巻き付いてた包帯が右腕から解けていく。

「そ、それは……！？」

少年の右肩から 黒い靄が出ていた。

【chapter 1 - 5】

「ひいいいいい！」

情けない声を上げて、霧戸はへたり込んだ。そのまま少年から下がっていく。でも悲しきかな、後ろにあるのは壁。行き止まりだつた。逃げ場はとうにない。

横を向くと、血だらけの死体となつた見知った顔の人間がいる。

「僕も口口されるのかよ！ イヤだイヤだイヤだああああああああああッ！！ 死にたくない！ やつと！ やつと僕は束縛から解放されたんだ！ なのに、こんなのって……酷いよ……」

心からの叫びが、少年の耳に入つている様子はない。霧戸は知らぬ間に涙を流していた。

彼は無表情で霧戸を見下ろし、こちらに一步ずつ近づいてくる。黒い靄は黒い右腕を形成し、いつのまにか右手には刀を携えていた。あれで呆気なく口口されるのだろうか。

「お願ひだ、僕を見逃してくれよ……」

つい先程聞いたばかりの言葉を、掠れた声で霧戸は漏らしていた。御堂の言葉だ。相手にしたことは自分に返つてくるということなのか。人生の最後にこんな大切なことを学ぶなんて……もっと早くから知つておきたかった。

少年の冷たい眼差しと、刀が目と鼻の先に迫る。

「助けて……！」

最後の悪あがきとばかりに、少年の細い両足を力強く掴む。けれど。

「あつー。」

いつも簡単に足で払われ、両手を離された。そして、風を切り裂くジュンッ という音と共に、霧戸の首目掛けで刀が振り下ろされ、唐突に視界が反転。少年の足下がはつきりと見える。

この時、首を切られたのだと理解した。痛みさえもないぐらいこっぱつせりと。

少年はポケットから携帯を取り出し、霧戸を写真に納めた。

事が済んだのか、少年は霧戸から遠ざかり、バイクのある所まで向かう。地べたに巻局を巻いていた包帯が生き物のようにシユルシリルッと動くと、彼の義手になる。

ヘルメットと上着を被り、彼はバイクに跨った。エンジンをふかして、一度も振り返る 霧戸を見る ことなく、その場を立ち去る。

彼がいなくなつて程なくして、霧戸の視界に白い霧がかかり始める。それと共に、急激に眠気に誘われる。これが死というものなのかもしれない。

後悔、無念、怒り、悲嘆といった運命の非常さを呪う言葉で心が溢れかえると思っていたが、意外にもそんな言葉は出ず、むしろ、安らかに眠れる気持ちよさに安堵していた。

薄れしていく景色。もうほとんど何も見えていない。死がすぐ近くまで来ているのだと確信した。だから、最後に何か言いたかった。声に出すことは出来ないが、でも、ありつたけの思いを胸に秘めて死のうと思つた。

早くしないと死ぬといつ焦りで、これでいいか、と半ば投げ遣りで最期の言葉を締めくへつた。

やよひなう。

+

「依頼を遂行してきました」

鳳外人弟は【鳳外ビル】に帰還するとビルの最上階である二十階の部屋を目指した。

そこは豪勢にも、一フロアを丸ごと使った部屋で、壁が全面金色のガラス張りだった。ここからならば、美しい夜景を一望出来ることが出来る。

金の羽毛で出来た絨毯が床に敷き詰められている。中央には、金箔をまぶした脚の短いテーブルが置かれ、そこに金の革のソファが左右に対峙する形で置いてある。

その向こう側では、金ピカの細長いデスクに肘を突いて座つている大柄の男がいた。

あの男がこのビルのオーナーにして最高責任者、鳳外絡繹からくじくである。

絡繹の横には常に全身黒ずくめの男が一人控えている。男らは、絡繹に何かあつた時、身を挺して彼の命を守る、護衛役。面識のある者でも絡繹は警戒を怠らない。たとえそれが、息子 人弟であつてもだ。

力タギではない人間がこのビルに何人も雇われているが、仕事は絡繹を守るだけではない。このビルは名目上宿泊施設となつており、各部屋の掃除や雑事、更に、ビルに訪れてきた来客者の身の世話をす。簡単に言えば、ホテルのボーキに、荒仕事をプラスしたよう

なものだ。

「そつか……じゃあ、お前、依頼者を呼んでこい」「はつ……」

絡繹が、横に控えていた男に目で合図すると、その男は返事をし、人弟に一礼して部屋を出て行つた。

絡繹は吸いかけの金の煙草を金の灰皿でもみ消し、立ち上がる。彼は金のジャケットを羽織り、金のパンツを下に着ていた。どれもオーダーメイドで、合計うん千万はくだらない。加えて、うん百万はするだろ?「ゴーランドの腕時計を右腕に身につけていた。

全身黄金色の男が目前にやってくる。煙草の臭いが鼻についたが、嫌な顔一つしない。敬意を表すため、人弟は腰を落としてわざと自分の身長を下げた。

「どれ、証拠を見せてみる、人弟」「分かりました」「ん……どうした？ 何をじっと見ている？」

絡繹は疑問の眼差しを向けてくる。

「いえ、その……目の方は大丈夫でしょうか？ 痛みや不快感、違和感はありませんか？」

絡繹の右目は金の眼帯で覆われていた。とある出来事が原因で彼の目は失明し、代わりに今は義眼を入れている。その出来事を作った張本人が人弟であつた。

だから人弟はいつも彼の右目を気に掛けていたのだ。

【chapter 1 - 7】

そんな人弟の心配をよそに、絡繹は露骨に表情を歪める。

「お前に心配される覚えはない。お前は医者か？」

「いえ、違います」

「なら、つまらんことをいちいち聞くな。己のことなど己が一番よく知ってる。ましてやお前は医者じゃない。それとも何か？ この目をお前は治してくれるど、やつらののだな？」

右目を指さして、絡繹は口角泡を飛ばす。ギラリと光る金歯が見えた。

「失礼しました。以後このよつな無粋な真似はしません」

十一分に反省した態度を取ると、絡繹の機嫌が收まる。そして、本来の話に戻る。

「依頼遂行の証拠をよこせ」

「分かりました。これです」

ポケットから携帯を取り出し、絡繹に写真を見せた。写真に映っているのは、頭部が切断された眼鏡の少年。一応、頭だけでなく身体の部位も撮つておいた。

「どれどれ……ふむ。おい、お前。依頼者が渡した、顔写真を渡せ」「はっ！」

絡繹の後ろで控えていた男が、腕に抱えていた分厚いファイルか

ら数枚の紙を取り出し、絡繹に手渡す。彼はその用紙を一通り眺めてから、もう一度携帯の方を見た。

「顔の照合は一致するが、後で依頼者に見て判断してもうづ。んで、この少年の横に映つているもう一つの死体は何だ？」
「それは、その少年に殺された被害者です。すみません、僕がもつと早くに彼を見つけていれば殺されずに済んだのですが……」
「はあ、糞餓鬼が！ 死んだ後まで面倒くさいこと押しつけやがって。お前、処理班に、すぐ側の死体も片付けるよう連絡しろ！」

お供の男が絡繹の命令を受け、すぐさま携帯で仲間と連絡を取り合っていた。

「つたく、大人しく死んでればいいものを余計なお世話してくれおつて……！」

「申し訳ございません。僕が絡繹様のお手を煩わせてしまったようで」

「謝るな。謝るぐらいなら、お前が死体の処理をしてこい」

ギロリと片方の目で睨まれ、人弟は口を閉ざした。

重い雰囲気を払拭するように、コンコンと高い音が鳴る。お供の内の一人が、依頼者を連れて戻ってきたらしい。

途端に絡繹の態度が激変する。先程までの苛々が嘘のように治まり、笑顔を作っていた。わざわざ依頼者のためにと絡繹自らが出迎え、更に、自分の手で部屋の扉を開ける。

普段の彼なら自分から扉を開けようとはしない。そういうのは決まって部下にやらせていた。自分の手でやるのが煩わしいからだ。でも、依頼者となると話は別である。彼は依頼者に対して丁重に

持てなすのだ。

「どうぞ、入ってきてください」

丁寧になつてゐるのは態度だけではない。しゃべり方も恭しくなつていた。

「ややひ、じちらへ」

満面の笑顔を振りまきながら、絡繩は依頼者の女性をソファに誘導する。

女性がソファに腰掛けるまで人弟はずつと立つて待っていた。絡繩にたたき込まれた、依頼者に対する誠意といつものだ。女性が座つてからソファにやつと腰を落とした。

「おぐつらぎをしているといひ、急に呼び出したりして申し訳ござりません」

絡繩は人弟の横に立ち、女性に対して頭を下げた。刈り上げた金髪の髪に驚いたのか、それとも、彼の丁寧さに恐れいつたのかは知らないが、女性はいえいえと激しく両手を振る。

女性は、三十代後半の若い母親だった。名前は依頼前に聞かされており、戸入静科^{といり しづか}と言う。長年着こなしているのか、スーツの至る所がよれよれになっている。長い黒髪を肩から垂らし、眼鏡を掛けている。髪を短くしたら、きっとあの少年の顔と重なるだろうと人弟は思つた。

疲れが溜まつてゐるのか、静科の顔には深い皺が刻まれていた。金箔の机のある一点を見つめながら、彼女は口を開いた。

「大丈夫です。で、あの、本当に……したのでしょうか？」

小さな声で呟いたので、途中聞き取れなかつたが、何となく想像

はついていた。だから、

「はい。『J要望通り、？狩り？ました』

絡繆のように表情を作ることは出来ないから、人弟は彼女を安心させるために声を和らげて答えた。

「狩る？」

「はい。Jから世界の業界用語で、？狩る？といつのはつまつ

」

「あ……そういうこと。分かりましたわ」

最後まで人の話を聞かず、静科は遮った。

人弟が何を言わんとしているのか、気づいたのだろう。

「狩る？……つまり、裏の業界では当たり前の専門用語。ここで行
われている対談は、決して表の世界のことではない。日に当たることのない、血生臭いことを取り扱っているのだ。これが、鳳外ビ
ルの本来の姿。そして、人弟の職業であった。

「念のために証拠品をお持ちしました。ショッキングな画像かもし
れませんから、心して見てください。また、気分が悪くなつたらい
つでも言ってください。医者をお呼びする準備は出来ております」

人弟が携帯を手渡すと、恐る恐るといった感じで静科は受け取る。
一度、深呼吸をして気持ちを落ち着かせてから、液晶画面に映つた
『証拠』を確認した。瞬間、ショックが大きかつたのか、携帯をソ
ファの上に落とす。

「大丈夫ですかッ！？」

人弟の声に静科は我に返り、慌てて携帯を拾い上げ、突き付けてきた。

「す、すみません。落としてしまつて。壊れてないですよね！？」

「落ち着いてください。これぐらいじゃ壊れませんよ。平気です。それよりも、大丈夫ですか？ 具合は悪くないですか？」

【chapter 1 - 9】

「ええ、気持ち悪くはないです。むしろ、何だかすつきりしたと言
うか……」

静科の言つ通り、真っ青だった顔が徐々に色を取り戻していく。
血の通りが常人よりも良くなつたようにも見える。

「その、ありがとうございます！」

「いえいえ。当然のことでしたまでです。そう言ってくださいま
すと、こちらとしては嬉しい限りです」

表情では伝えられないでの、人弟は立ち上がり、胸に手を当てて
一礼した。

「そ、そんな畏まらなくってもいいですわ。私が？やつて？とお願
いしたことなのですから。でも、これで世間の皆様に、息子の汚名が
広がらずに済むんですね？」

「はい。霧戸君が、学校の生徒を？狩つた？という事実は永遠に闇
に葬られました。なお、霧戸君の遺体は我々の方で処理をしました。
警察が動いたとしても、足取りを摑めないように工夫もしました。
安心してください」

人弟は静科の手を取り、親身になつて話を聞く。

ふと、手に温かい温度。彼女の瞳から頬に伝つて落ちた涙だつた。
それに静科は気づき、側に置いてあつた使い古びたバッグからハ
ンカチを取り出すと、人弟の手を拭いた。

「「」、「」」めんなさい。つい、嬉しくなつてしまつて」

「我々は、依頼者が喜んでくれることが何よりの喜びです」

決まり文句を言つと、彼女はまた涙を零していた。

「でも、残念なお知らせが一つあります。僕のミスで、もう一人の被害者を出でしまつたことです」

「あつ、それは……」

「安心してください。そちらの方も処理しました。何者かに襲われたという風に装いましたので」

「よ、よかったです……。ありがとうございます。なんと感謝したらいいのか……」

何度も何度も静科は頭を下げ、感謝の意を示した。

人弟は、隣で黙々と自分たちの話を聞いていた絡繆に田で合図を送る。これで全ての話が終えたという意味だ。

人弟と絡繆が場所を入れ替え、今度は絡繆が話す番である。

「静香様、すみませんが少しいいですか？」

二口りと、見る人によつては氣味悪がられるだらう満面の笑みで彼は静科に諭す。

彼女は涙を拭い、はい、と短く答えた。

「汚い話になるのですが、お金の方を払つてもらつてもいいですかね？」

絡繩は懐から用紙を取り出し、テーブルの上へ置く。それを静科が見た途端、びくっと身体を震わせ、何故か沈鬱な表情をする。

「これは領収書みたいなものですね。サインをお願いできますかね？」

絡繩に促され、静科は用紙にペンを走らせる。その間も彼女は暗い表情のままで、決して晴れなかつた。

手早く書き終えて、これでいいですか？」と絡繩に尋ねる。

「はい、結構ですね」

「なら、もう帰つてもいいですか？」

立ち上がる彼女を絡繩は手で制した。

「コッ」と笑いながら、

「まだです。別に依頼者を信頼していないわけじゃないんですよ。でも……依頼の料金分をちゃんと持つてきているのか、確認したいんですよ。ですから、そこにあるケースを見せてくださいませんかね」

彼女の足下にある黒のアタッシュケースを指す。静科がこの部屋に訪れた時に持つてきっていたものだ。

それを彼女は持ち上げて、テーブルの上へ置く。ずしりと重みのある箱だった。

「ここに、言われた通りの額が入っていますわ。では、私はこれで

……」

静科は素早く席を立ち、走り出す。が、行く手には絡繹の部下がいて、彼女を拘束した。

「はつ、離して！」

「その願いは受け入れられないな。何故、そこまでして逃げるんだ？」

もう、優しい演技をしている絡繹ではない。顔は笑つておらず、真顔だつた。声質は硬くなり、人を殺せそくながら鋭い視線が静科の方へ向けられる。

仮面を脱ぎ捨てて本性を現した彼に、静科はヒッと短く声を漏らしていた。

札束から一枚のお札を取り出し、天井の明かりで透かして見定める、絡繹。ふむ、と一つ頷き、次のお札も同じように透かす。そして、ああ、と落胆の声を漏らす。

「束の初の一枚だけは本物で後は偽札か。……で、この落とし前はどうつけてくれるんだ？ なあ」

「絶対に後で払います！！ ローンを組みますから！ 何でもしますから！ だから、見逃してください」

拘束していた部下の手を振り払い、静科は底に額を突いてお願ひをしていた。それを絡繹は冷めた目で見る。

「助けるだと……？ そんな甘い話はこの世界に無いんだよ。それに

彼は静科の前まで行つてしゃがみ、彼女の顔を持ち上げて、意地の悪い笑顔を見せた。

「何でもするつて言つたな？ なら、死ね」

その言葉を聞くと、彼女の顔が恐怖で歪み、崩れ落ちた。

「依頼者　いや、？裏切り者？を排除しろ。？処刑部屋？に連れて行け」

部下に引き摺られてこの部屋を出て行くまで、静科は嫌嫌嫌と抵抗していた。

そして、彼女を見たものはいなくなつた。

【chapter 1 - 1】

力タカタカタと規則的な音を立てて、先生が黒板にチョークで文字を書く。

それを時鈴李利は、机に肘を突いてどこか遠い出来事のように眺めていた。

彼女だけだ、ここまで呑気にしているのは。周囲にいる生徒は先生の話と黒板の文字をノートにひたすら書き写している。期末試験まで残り一週間もないのだから当然だろう。

李利は窓の方に目を向けた。今日も元気な太陽様が、地上にいる人間共を暑さで蹂躪する。

熱にやられたのか、それとも気になつたからなのか、昨日の夜の出来事が蘇つた。

昨日の夜、李利は茹だるような暑さに負け、家を飛び出してコンビニへ向かった。アイスクリームが切れていたから、わざわざ買い出しに行つたのである。

寝起きのためパジャマ姿だが、この際は仕方ないと自分に言い聞かせる。早くアイスクリームを食べないと身体が熱さで溶けてしまいそうながらいの暑さだったから。

十一時を回り闇が一層深まつてくる頃、李利は路地裏にいた。家からコンビニまでの道程をショートカット出来るから、使っていたのだ。

ただし、路地裏を通るのは学校に通学する際か、学校の帰りだけだ。夜に訪れたのは初めての経験である。

夜の路地裏は昼間とは違ひ人の気配がなく、不気味だった。

身体の火照りを取りたい一心で走っていると、どこからか乾いた発砲音が何発も聞こえた。そして次に、誰かの悲痛な叫び声が夜の静寂に木霊する。

何かあつたのだ。確かめようかと思ったが、怖くてその場に立ち止まる。もし事件に巻き込まれてしまったらと考へたら、足が竦んだ。

「でも、困つてゐる人がいるなら、助けないと……」

相反する二つの感情が、李利の心にあつた。

悩むまでもなく、李利は怖さより人としてあるべき道徳の方を選んだ。もし親友がこの場にいたら、「お節介焼きなんだから……。あんた、自分のことをもっと大事にしたほうがいいと思うよ?」と言っていたことだろう。

声のした暗い道を進んでいくと、そこは行き止まりだった。

その行き止まりに、二人の男がいた。どちらも自分と同一年ぐらいだろうか。まだ若さが残る少年達だった。

李利はビルの壁から二人のやり取りを覗き見る。彼らがこつちに気づいている様子はない。

制服を着た眼鏡少年は膝を地面に付けて、全身黒色の少年に許しを請っていた。彼らの声が小さくて何を話しているかまでは詳細に聞けなかつたが、少なくとも眼鏡少年の助けを呼ぶ声は聞こえた。

でも、全身黒色の少年は眼鏡少年の話など聞かず、眼鏡少年の元へ近づいていく。

ふと、黒色の少年に意識がいった。何かあると直感したからかもしれない。

黒色の少年には、人間にあるべきものがない。右腕が、肩からごつそりなくなっていた。けれど、次の瞬間には、右腕がまるで異次元の彼方から呼び出されたかのようにぽつと現れたのだ。

驚きはそれだけではない。彼の右手には、右腕同様にどこからともなく現れた刀が握られていた。彼自身の身長よりも長い刀身。電柱の光に反射し、不気味に光るそれは本物だと告げていた。

李利は突然の出来事に混乱していた。

眼鏡少年を助けなければ殺されてしまう。

なのに、危険だと非常ベルが頭の中で鳴っているといつのに、足は一步も動かない。

【chapter 1 - 2】

セリフひとつでこる内に刀の切つ先が眼鏡少年の首田掛けて振り下ろされる。飛び散る鮮やかな赤い飛沫。直後、「ト」と重い物が落ちた音がする。眼鏡少年の顔がゴロゴロッと地べたをボールのように転がり、やがて止まる。

見たくないのこ、意図に反して目が彼らの方向へ向けられる。

心臓が異常に早く脈を打つていて。自分でさえも分からぬ裡なる衝動が沸き起る。恐怖でもない、怯えでもない、緊張でもない何か。

例えるなら、やっぱまるで、恋にでも落ちたかのよつ。

恋を経験したことがないから、恋とは一体どうこうものなのかなは分からぬ。けれどこれがそうなのだろうとこつ確信があった。その確信がどこから來るのか定かではないが。

確かにことは、釘づけにならぬぐらご用が向けられたといふ。
あの、全身黒色の少年に。

(……ああ、彼なら私の母親を殺してくれるかもしれない)

「ねえ、李利……」

「……」

「李利つじばあ……」

「……」

「わうやつて、あたしのこと無視するんだね……こいや、もう、イ

タズラしちゃうから！　えい！」

「こゆふこゆ。

「……ひやッ！」

突然の予期せぬ出来事に、李利は素つ頓狂な声を上げて席を立つた。背後には、妙に馴れた手付きで自分の慎ましい胸を揉みしだく親友の姿。

貞操を守るべく、腕を交差させて胸をガードした。

「なつ、何すんの、わつき！　馬鹿！　変態！　痴漢！　えつち！」

少し涙目になりながら、李利は上目遣いでさつきに抗議する。えへへと、彼女は可愛いらしい笑みを浮かべていた。

彼女は月宮さつき。つきみや 李利が桜坂高校に入学してから知り合つた仲だ。髪を赤茶色に染め、編んだ前髪を顔の横に垂らしていた。人懐っこい笑顔が印象的で、男性陣だけでなく女性陣にも受けが良い。運動をやっているからか、引っこんでいるところは引っ込んでいて出ているところは出でている、完璧なプロポーション。……李利はそれを見る度に、自信が萎れていいくのだ。

「だつてー、何言つても聞いてくれないんだもん。てか、ちょっと大きくなつた？　AマイナスからAぐらいにはなつた気がする」

さつきはタコのように奇妙な手の動きをする。残念ながら掴めるほどのサイズは無かつたのだ。

何で触られて貶さなければならないのか、不条理に疑問と悔しさを覚える。

「なーにトンチンカンなこと言つてんの。もつとっくに放課後だよ？」

「えつ？」

さつきに言われ、辺りを見回した。先生の姿は既にない。生徒の中には帰り支度を始めている人さえいた。窓の外から入り込む寂しい橙色が教室内を優しく照らしていた。

「ぼーっとしちゃつてさー。何？ 今日のあんた一体どーしちゃつたの？」

「どうしたつて、何が？」

「だーかーらー、はあ。本人がこれだもんね、気づいてるわけないか。今日の季利色々とおかしいよ。授業中ずっと浮かれない顔していたし。あたしの言葉も耳に入つてないようだつたし。もしかして、好きな人でも出来たー？」

意地の悪そうな、でも決して人を不快にさせない笑みで、彼女は問い合わせた。

【chapter 1 - 3】

瞬間、沸騰したヤカンのよじに顔が火照ったが、動搖を見せないよじ小さな胸を出して毅然と振る舞つた。

「そそそ、そんなわけない。だつ、断じて違つからなー」「動搖が声に滲み出でていますよ、奥さん。そうかそうかー。遂に、りりーも乙女心といづもの知つてしまつたかー」

ふふーんと、何やら得意げに鼻を鳴らすさつき。彼女のその態度を見て、少しだけとする。

「その話はもういいから。こっちに来なさい」「久しぶりの説教ですかー？ からかっただけなのにー。怖いよ、そっちに行きたくないよー」「違う。説教してやりたいけど、今回は特別に許してあげる。……えつと、起こしてくれて……いや、放課後だと教えてくれてありがと」「ちょっと今日のりりー怖いよー。なーんか裏がありそう。彼女がこんな優しいわけがない、みたいなラノベの名前がありそうなぐらいい怖いよー」

とか何とか文句をぶつぶつ垂れながらもさつきはひびひびに来た。

「ほり、ネクタイが曲がつてゐる」

李利が手を伸ばすと、さつきはびくっと身体を震わせた。けれど抵抗しない。

ネクタイを解いて、もう一度最初から結び直してあげた。

「ありがとう、リリー。さすが第一のお母さん」「失礼な！お母さんと呼ぶのは止めるとあれほど言つてるだろー」「だって、りりーお母さんみたいなんだもん。ネクタイを直してくれたり、髪の毛を梳いてくれたり。面倒見良すぎやるよー。でも……こんな優しくて可愛いお母さん一人欲しいかもー」

両手を合わせて、キラキラと皿を輝かせるさつきの頭にチヨップした。

「イタツ！」

「冗談はよせ。さつきのお母様が可哀想だ」

「えー、ホンキで言つたのにー」

親友のさつきと馬鹿話で盛り上がり上げていると、大声を上げてこちらに近づいてくる一つの影。

「ななななんだつてええええええええええー！」

男子生徒は、李利達の側で止まると膝に手を突いて息を切らしていた。

「あ、志村^{しむら}じゅん」

さつきが気軽に男子生徒の名前を呼ぶ。すると、彼は顔を上げ笑顔を見せた。

「おひ、さつきちゃん。それに、リリーー！」

「リリーと呼ぶな。時鈴さんと言え」

「厳しいなー、リリーは」

「厳しくない。これが普通なんだ、さつや」

李利は男子生徒を見る。彼は志村颶斗。^{志村颶斗} 李利と同じクラスの生徒。入学時から一学期になるまで一緒にクラスだった。髪を茶髪に染め、制服を着崩し、いかにもチャライ男を演出。本人はそれが格好いいと思っているらしい。李利には彼の感性が分からなかつた。

【chapter 1 - 4】

「で、何で君がここにいるわけ？」

「いやわ、りりーが……」

「時・鈴・さ・ん・だ」

間髪入れずに、李利は志村の発言を遮った。彼はアハハと悪氣も全くない笑顔を作る。

「時鈴さんに好きな人が出来たと聞いて急いでやつてきたんだ。本当なのかい？」

「……！」

瞬間に顔に熱が宿つた。鏡を見なくとも自分の顔が真っ赤になつているのが分かる。

「嘘だよな……。ねえ、どうなのさつまちやん？」

「どうなのって言われてもー。わー、詳しいことは知んなーい。でも、ホントなんじゃないかなー、」の様子を見る限りだと

二人して疑問の眼差しを自分に向ける。何も悪いことはしていないはずなのに、何故だか悪いことをした気になつてしまつ。

「というか、そういうた情報は一体どこから手に入れてるんだ？」
「尊好きの俺だから、そんくらいの情報簡単に耳に入つてくるよ。で、実際のところは？」

「君に好きな人が出来たかどうか教える道理はないー。さつきならまだしもー！」

「つう、なんたる酷い仕打ち。俺凹みそ！」

「「」めん」「めん。」言こ過ぎた。悪かった。ほら、これを使え

さめざめと泣く志村の傍らに寄り、ハンカチを手渡した。
ハンカチを受け取ると、彼はちんつと鼻を勢いよくかんだ。

「おいそれ私のハンカチ……」

「あ、ごめん時鈴さん。つい、うつかり

「うつかりつて……。まあいい、洗うから。というか、噂好きの君のことだろう……もつと役に立ちそうな情報はないのか？」

「うーん

顎に手を当てて、志村は考え込みました。数秒の後、ぽんと手の平を打つて、人差し指と中指を立てる。

「一ひとつ話をしようか。まずは一つ目。今、世間を騒がせている【連續殺人鬼】のことだ」

何でも彼が言うには、今朝方連續殺人鬼の被害者がまた出たとのニュースがやつていたそうだ。これでその連續殺人鬼の犯行は合計七人目に及ぶ。被害者はどれも共通して男性だつた。

この事件がどうしてここまで大きく取り扱っているのか。それは、発見された死体の損傷具合が異様だからだ。連續殺人鬼が犯したと思わしき獵奇的事件には、どの死体にも熊に食われたような大きな歯形が残っていた。

だから連續殺人者でもなく、連續殺人犯でもなく、連續殺人？鬼？なのだ。人間ではない、この世ならざるもののは手による殺害だから。

「更に、この事件には、共通の目撃証言が多く寄せられているらしいよ。何でも、三十代後半の女性が現場付近に必ずいるらしい。もしかしたら、連續殺人鬼の犯人は……」

怖さを誘発しようと、志村は声をわざと潜める。その雰囲気に対してられて、さつきはぐくりと唾を飲み下した。彼はゆっくりと口を開いた。

「熊かもしれない」

「ひゃあああああ！ って、そんなわけあるかーい！」

「でも、気をつけることには超したことないよ。特に夜道とか」

「うーん。でもさー、被害者って全員男なんでしょう？ だつたら、志村が気をつけた方がいいんじゃないかなー」

「確かにそうだな……。俺も殺されるかもしれない！ なんてたつてイケメンだから！」

「自分で言つて、どうかと思つよー。別にイケメンじゃないしねー」

「酷い……」

「あつははー」

「……」

楽しい二人の雰囲氣とは違い、李利は表情を曇らせていた。それに気付いたさつきが「どうしたー」と、聞いてくる。暗い思いを払拭しようと、無理矢理笑顔を作った。

「いや、何でもない。気にしなくていい」

「気にするなつて言つたつてー、そんな顔してたら氣になるよー」

「大丈夫、平氣だ」

とは言つたものの、全くもつて平氣ではなかつた。

彼らに言えるわけがなかつた。連續殺人鬼の正体が自分の母親だなんて。

李利の母親、時鈴巳煉は、李利の父親、斧樂みれんとのもつれで彼を殺してしまい、家を出て行つたきり行方を眩ました、はずだつた。蓋を開けてみれば、【連續殺人鬼】という通り名が付けられるほど、有名な殺人犯へと昇格してしまつたのだ。

【chapter 1 - 6】

何故それを李利自身が知っているのか。

現場の目撃証言から、三十代後半の女性 巳煉と同じ年齢が拳がつていてるからといつものもあるが、連續殺人鬼による最初の被害者が斧樂だつたからだ。斧樂は熊並の大きな獣によつて食い千切れ死んでいた。それそれはもう無残な姿で、人の死に尊厳というものがない。

第一発見者が李利で、その残酷な仕打ちを見た瞬間、嘔吐したのを覚えている。

どうして斧樂を殺したのか、その理由を聞かされていない。 巳煉は何も告げずに去つてしまつたからだ。

だから知りたかった。奇行に走つた理由を。

それに 。

「お母さんを殺さなければならぬ……！」

これ以上、被害者を出さないために。人々に迷惑を掛けないために。

彼女らに見えないとこりで李利は握り拳を作つた。

「志村君、もう一つの話題は？」

「あ、うん。もう一つの情報は、なんというか、まあ俺らには関係ないんだけど……」

「いいから、話してくれ」

李利に疑問の眼差しを浮かべていた彼だったが、渋々といった感じで口を開いた。

「殺人犯が何人も殺される事件を知ってるかい？」

「どういうことだ？」

「まず、【機関】のことは一人ともござ存じ？」

「知らん」

「知らないい」

同様の反応を示す一人に、志村はヤレヤレと両手を広げておどけてみせる。

「全く、仕方がないな。情報通のこの俺様が教えてあげるよ

彼によれば、機関といつのは、警察のような治安を守る自治組織のことらしい。

但し、機関は警察とは勝手が違うのだと言つ。機関の仕事は、殺人犯を取り締まること。警察でさえも厄介だと思われる凶悪犯罪を主に扱う。機関に雇われているほとんどの人間は、プロの殺し屋だけで構成されている。

警察は、殺し屋だらけの機関を危険な存在と見なしており、排除したい組織ナンバーワンであるため、ただいま絶賛犬猿の仲であるらしい。

「どうわけなんだ。二人とも分かつたかい？」

「機関のことは理解した。一体どこからそういう情報が手に入るのか、あえて聞かないことにする。けどそれが、殺人犯が何人も殺される事件とどう繋がるんだ？」

「その事件が、機関の手によるものじゃないってことだよ」

「ということはー、機関とは違う殺し屋の組織が動いているってことー？」

「もうー！ その通りだよ、さつきちゃん！」

人差し指をさつきに突き付けて、力説する志村。それから彼は窓に向かい、橙色に染まる空を眺めた。カーカーと、カラスの侘びしい鳴き声が聞こえてくる。

「もうすぐ日が暮れるな」

その言葉にさつきと李利は窓の外を眺め、うんと頷いて同意をした。彼は振り返り、続ける。

「機関とはまた違つた第二の謎の組織が動いていると言つたよな？ これは真偽の怪しい匿名掲示板からの情報なんだけど、実際にその殺し屋に依頼を頼んだ人の書き込みがあつたんだ。数件だけじゃないよ、何百件とあつたんだ。しかも、昨日起きた？殺人鬼殺害事件？に関与してる依頼者が書き込んでいたのを見た。何故か、すぐにその書き込みは消されていたけど……。だからまあ、本当にあるんだと確信したよ」

志村は、自分がしてやつたりみたいな得意げな顔で話し出す。

彼の話を聞いて、李利は昨夜のことを思い出していった。

殺人現場、おそらく殺人鬼殺害事件の現場に自分がいたことは、到底この場で言えるわけがない。でも、志村の情報が確かだと分かった。だから。

「志村君、その謎の組織がどこにあるのか知っているか？」

まさか興味を示すとは思わなかつたのか、志村は驚いた顔をしていた。

「えっ？ 知りたいのかい？ もちろん知つていけど」

「ああ、なら教えてくれ」

「ま、まあ時鈴さんの頼みなら……喜んで！」

嬉しそうにする志村に、李利は首を傾げる。さつきは「どうと、「二人とも難儀だねー」と、何やら楽しげな笑みを浮べていた。

+++

学校を出た李利は、さつきと志村と分かれて住宅街を走っていた。いつの間にか空の色が変わっている。さつきまで明るい橙色だったのに、今は、暗い紫色になっていた。

道路には一人分の小さな影が映り、帰宅途中だったのか、サラリーマンやら学生やら主婦やらが横を通り過ぎる。

猫やカラスといった動物さえも家へと帰り支度をしているというのに、李利はその逆。今から家ではない、とある場所に向かつていた。

【chapter 1 - 8】

住宅街を突つ切ると商店街に出る。そこを更に抜けると、様相は一変する。新旧様々な建築物が建ち並ぶ区間に入るのだ。いつも新たな建物が建築されても、少し古くなつた建物が壊されていくの繰り返し。そこは、時代を反映する場所である。

李利はポケットから携帯を取り出し、画面を見る。志村からメールで送つてもらつた目的地までの地図と目的地の写真が映されていた。

目的地の写真と、目の前に悠然と構える巨大なビルを交互に見た。

「やつぱつここか……。しかし、まさか昨夜の殺人現場の近くにあつたなんて、しかも自宅の近くだつたなんて驚きだ」

何度も確認してしまつぐらこのビルの外見は異様だった。二階建てで、外装が全て金ぴかの塗料で塗つてあつたのだ。このビルのオーナーの趣味が疑われる。

入り口付近には、『株式会社鳳外ビル』と彫られた金色の石があつた。表向きは株式会社と名乗り、裏では人を殺して金儲けをする悪徳商売屋。……悪徳で済めばいいが。

「うーん、どうじよひ」

ここにきて迷いが生じる。勢いで来たはいいものの、本当に依頼を引き受けてくれるのかどうか。そもそもどうやって依頼するのか。ここが血生臭いことを専門に扱つてているのかどうかさえ定かではないといつもの。

「志村が言つには殺し屋らしいが……。でも実際にここで依頼を頼んだわけではないし。うーん」

ビルの側をうづりようしていると、通行人が不審な目でこちらを見て横を通り過ぎる。

立ち止まりふと天を仰げば、青黒い空に一番星が小さく光っていた。本格的に日が暮れるのも後少しどこかだらう。

「あー、もう。迷つても仕方ないか」

頬を叩き、うつしーと気合いを入れて、金の自動ドアをくぐつた。

中は、高級ホテルと見紛うほどの豪華絢爛さ。上下左右、目に入る物全てが金、金、金、金。人以外が全て金というほど、金で溢れかえつていた。絨毯は金の糸で編まれており、エントランス近くの休憩所には、金の装飾が施された椅子やテーブルがいくつも置かれている。天井には、黄金色に輝くシャンデリア。受付の前に、鮑を捕ろうとする熊の木彫りではなく金塊。

見ているだけで氣後れする光景だった。早くも帰りたい気持ちが心を占め始める。

でも、ここまで来たのだから、と握り拳を作つて気合いを入れ直す。

「あの、すみません」

「はい、なんでしょう?」

李利が受付嬢に話しかけると、彼女は満面の笑みで対応してくれた。意外に普通の対応をしてくれたので、少し面を食らう。女子高校生だからと、話さえも聞いてもらえないと思っていた。何せ裏の顔が、殺し屋という物騒なところなのだから。

「ここに来た理由を簡単に説明すると、受付嬢の表情が急に強張る。何やら彼女も裏事情を知っているらしい。一瞬でも彼女だけは、普通の人だと思つてしまつた自分の認識の甘さを叱咤した。

手招きされ、「耳を貸してください」と囁かれる。李利は素直に従い顔を近づけた。

「いいですか。ここを真っ直ぐ行つてもらい、突き当たりにぶつかりましたら、右の方に通路がありますので、そこを進んでください。そしたら、また突き当たりに出るので、左に曲がってください。そこまで行けたらエレベーターが見えると思います。念のため、エレベーターに業務の者をこちらで用意させます。それを目印にしてください。もし迷つた時はここまで戻るか、従業員に話しかけてください」

従業員に話しかけて何になるのだろうか、と思つたが、受付嬢がこの会社の裏事情を知つてゐるぐらいなのだから、彼女以外の他の関係者が知つていてもおかしくはない。

適地のど真ん中にいるのと一緒なのだ。鳳外ビル……ここには改めて危険な場所だと李利は理解した。

李利は、受付嬢に言われた通りの道筋を辿る。エレベーターまで着くのに五分程度も掛かった。エレベーター付近には、サングラスを掛けた全身黒服のいかにもそつち側の男が待つっていた。服の上からでも筋肉が盛り上がっているのが見て分かる。あんなのに首を掴まれたら、簡単にへし折られるだろう。

「どうも、？お密様？。」から乗つてください」

男は低い声でしゃべり、エレベーターの中を恭しく手で示した。意外にも礼儀正しい。

恐る恐る箱に乗り込む。警戒心はあったが、ここまで来たのだから、と自らを鼓舞した。

重苦しい空気を充満させながら、エレベーターは上へ上へと上っていく。最上階の一十階に辿り着くまでずっと無音のままだった。程なくして、ちん、と高い音が鳴り、ドアが開かれる。重量を伴った空気が、開いたドアと共に流れていき、李利はやっと生きた心地をする。

かと思ひきや、今度はあまりの異様な光景にたじろいだ。

一階のHントラスホールで見たのよりも数倍輝かしい空間だった。一フロアまる」と使った部屋。全面金色のガラス張り。絨毯は毛布のように柔らかく、こちらも一階の絨毯と同様に、金の糸で縫われている。黄金色の光を放つシャンデリアが、より輝きに拍車を掛ける。

部屋の中央に、革のソファに腰かけて対面している一人の男女。

彼らの向こうには、縦に長い金のデスクに両肘を突いて座つている、全身金色の男がいた。比喩でも何でもなく、本当に全身金色だったのだ。きっと彼がこの氣色の悪いビルのオーナーなのだと李利は瞬時に悟つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3851z/>

感染殺人～バイオキリング～

2012年1月8日18時50分発行